

# パートナー香澄

2008年1月31日発行

パートナー香澄編集委員会

## 【パートナー活動等の紹介】



(研修グループ)

主に研修室での環境学習の指導補助を行っています。グループ内での勉強会(指導方法等)もすでに10回を越えました。常に向上心を忘れません。



(生体グループ)

ビオガーデンプロジェクト。センターの池や竹林、ススキ畑等の整備を行っています。センターの美化に大助かりです。



(図書グループ)

主に新聞記事のスクラップ作成を行います。今年度からは、読みきかせも始まりました。



(イベント・記録グループ)

センターが主催又は参加するイベントの補助を行います。悪天候でも皆さん張り切ってお手伝いして下さい。



(生体グループ・魚プロジェクト) (生体グループ・植物プロジェクト)

魚類の定点観察や自然観察会の補助などを行います。展示室の水槽の管理や清掃も毎週欠かせません。



湖岸植物の定点観察や野外講座の補助、資料整理などを行います。皆さん活動的で知識豊富です。



(エコ農業クラブ)

パートナーの自主活動で循環型農業を実践しています。今年度は、オクラ・きゅうり・大根などを収穫しました。

(パートナー担当:井上)

## 新しい仲間づくり

パートナー活動の中に、2つの自主活動ができていることをご存じですか?エコ農業クラブとパートナーズゴルフクラブです。

その1つのパートナーズゴルフクラブは、現在登録メンバー18名(パートナー14名、センター職員4名)。月曜日が休館日であるメリットを生かし、低料金の月曜ゴルフコンペを実施し、この1月で第4回を数えています。参加者は毎回3組。皆さん、普段のパートナー活動のときとは違った一面を見せながら、和気藹々の1日を過ごしています。

パートナー活動の大きな目的に仲間づくりがあります。これまで会社など所属する組織や家族生活で築いてきた人間関係、それに合わせて作ってきた自分の仮面。それを脱ぎ、本当の顔を覗かせながら、新しい仲間たちの中に入り、別の自分を発見していく、これこそ、人生の一段落をつけた者の醍醐味だと信じています。センターパートナー活動もそこを基本に進めていくべきだと考えています。

私も定年まであと2年。いろいろな人達との付き合いを今のうちから楽しみにしている今日この頃ですが、目標の90を切る日は来ないような気がします。

(副センター長:井上 操)



## 2007「エコ農業クラブ」活動記

昨年5月の第2期パートナー・グループ活動説明会で、「エコ農業クラブ」の立上げについての呼びかけを行い参加者の募集をしたところ、20名（内1名はパートナー未登録）の応募があり。8月5日（日）応募者による集会をセンター研修室で開き、クラブ設立のねらいや、活動計画等について相談し今後の活動方針を確認した。

この「エコ農業クラブ」は、パートナーの自主的な活動であることから作付けする野菜の苗や、種子などは参加パートナーの個人的努力と協力に委ねられている。と同時に、農業を通して霞ヶ浦の水質浄化意識の向上、PRに資する“ねらい”から、栽培方法（特に無農薬、有機肥料を主体とした施肥等）や収穫物のセンター活動への利用など種々の条件下での船出となった。

今回の作付作物は、サツマ芋（紅アズマ約150本）、カボチャ、キュウリ、トウモロコシ、ニガウリ、オクラ、大根、秋どりジャガイモ、白菜などが提供されました。

しかし昨年のでかい残暑から、白菜は全滅、ジャガイモは2kgの種いもで5～6株を残し他は腐敗してしまいました。

懸案の収穫物の処理については、毎日の収穫が必要なキュウリ、オクラなどはセンター・ホールに展示して来館者や職員らに持ち帰り提供した。イベントでの活用については、9月29日のパートナー交流会にサツマ芋、カボチャ（ふかし芋、鉄板焼き）を提供し、12月2日の収穫祭では当日の「生き物G：ビオ・プロジェクト」活動参加者も合流し、収穫物に加えて会員持ち寄りでの楽しく、意義ある反省・食事を開催した。

今年度の残りの活動は、堆肥づくりを行い、次年度の作付けに備えた土づくりに専念する予定である。

（有吉）-

## 巴川探検隊に参加して

昨年秋の巴川探検隊にイベント・記録グループの一員として参加しました。巴川探検隊は“楽しみながら巴川流域・地域を発見・知るにより流域のネットワーク化、より美しい北浦の継承など”を目的として行われています。流域市町村市民団体などが主体となり流域の小中学生や保護者、住民を隊員として募集し毎年2～3回開催しています。今回は巴川河口近くの銚田市の“ホットパーク銚田”周辺を会場にまわりの植物や生き物の観察、歴史探訪として県重要文化財の無量寿寺の見学、巴川の水質調査と盛りたくさんのプログラムを流域の笠間市・茨城町・小美玉市・銚田市から小学生を主体に100名を超える参加者が体験しました。

地方の田舎町で過ごした私の子供の頃は川で溺れながら泳ぎを覚え、魚釣りをと近くの川は遊びの場の中心で、川をきれいにしようという気持ちも結構あったような気がします。

環境問題は一朝一夕に改善されるものではなく、息の長い活動だと思えます。その第一歩がその場所に親しみ関心を持つということだと思えます。巴川だけではなく桜川・恋瀬川・小野川でも同じような探検隊が開かれています。皆さんも機会があったら是非参加されて見ては如何ですか。

（安川）



## “地球の危機”に思う

それは、大きな津波が人と家を飲み込む映像で始まった。

まだ、正月気分も覚めやらぬ中、そのテレビ映像がショックだった。何事かと番組表を見ると「地球危機2008～地球温暖化でいま何が起きているか」のドキュメント番組であり、次々に映し出される映像に正月気分も吹っ飛んでしまった。

満潮の東京湾で異変、海面上昇で船が橋をくぐれない。陸地が2000m後退で一万人の家が水没した環境難民の島。巨大な湖が消滅した環境破壊の現場。減少する熱帯雨林。

私は、鳥肌の立つ思いで地球の危機をあらためて感じ、この危機迫る地球の現状を一刻も早く誰かに知らせようと思い、まず嫁いだ二人の娘に急ぎ連絡した。しかし、お笑い番組でも見ていたのであろう、チャンネルはどこ？などと騒いでいる。私も含めた大方の人々は地球温暖化が大きな問題だと知っていても、迫り来る現状認識はゆるいものなのである。



日本が与える影響についても例を挙げ紹介していたのだが、幕の内弁当の食材についてであった。11品の食材のうち、国内調達は4品で残り7品は海外からの輸入、それも北欧や中東など何万キロも離れた場所からCO<sub>2</sub>を放出しながら、船や飛行機で運ばれてくるのである。その弁当ですら賞味期限が切れると、一部は肥料になるが大方は焼却されてしまう。この現状に我々はどうか対応すべきか、もっと、もっと真剣に考え行動しなければならないと痛感した。

今回の映像のように様々なコンテンツを駆使して情報を流すことも有効だろうし、どんな小さな事でも躊躇せず行動を起こし、その輪を大きく広げていく勇気が今、求められているのではないだろうか。

(尾形)

## 日本一汚い川

あなたが住んでいるところに川があって、その川が日本一汚い川と言われたらどうしますか？先日 NHK テレビで放映された内容の一部を紹介しします（ワースト順位付：NHK 独自の調査データ）。それは春木川といって千葉県市川市を流れ東京湾にいたる全長約 2km ほどの川です。この地区の自治会が立ち上がり市、県、国交省と一緒に取り組んだものです。汚染の原因は生活排水であり約 10 年前から汚染され、川は濁って底はヘドロが堆積している。

ワースト 1 から脱出するべく対策をとった主なものとして

- 1) 台所対策と称して各家庭で調理した後のフライパン、鍋等に付着している固形物はヘラまたは紙で拭き取ることで、つまり固形物は流さない事を主に広めた。しかし台所対策として 13,000 人分は必要であった。努力の甲斐があって台所対策は 2900 人から 9,500 人までに増えた。
- 2) この汚れた春木川を周辺住民で清掃することにしたが、住民の安全面を考えると危険なことから行政が実施した。周辺住民は総勢 500 人が参加、沿岸の雑草とり、側溝のヘドロ除去で協力した。

昨年 4 月から 10 月までを調査した結果、ワースト 2 位になったそうです。自治会の人達は「これには終わりはありません」と言っていたのが印象的でした。

この番組を見て感じたのは周辺住民の人達に、川が汚くなったのは自分たちの責任という意識があまりなかったこと、それを理解してもらい、改善し、そして広めるにはさらに大変な努力が必要なことです。

川や池、湖があるとそこには公園や散歩道などがあり、住民の憩いの場所となっていることが多い。そうした川、池、湖等は如何に存在価値が大きいかを再認識すべきだろう。

(栗原)

## 野鳥と親しむ



家の庭や目の前の雑木林そして近所の家の庭などを眺めていると、色々な野鳥が観察できる。

4 年前に、もう少し野鳥についての知識を得たいと思い「野鳥の会」に入会し、これを機会に自宅の庭に餌台を 2 個設けた。餌は主にミカンと脂肉。脂肉は餌台の近くの木の枝に巻きつけている。

例年 11 月中旬頃、自然の餌がなくなると鳥たちが餌台に飛んできて餌の争奪戦が始まる。常連はヒヨドリ、メジロ、シジュウカラであるが、たまにシロハラが加わることもある。

この中で強いのがヒヨドリである。気が荒く警戒心が強い。先客がいると鋭いくちばしで追い払い、ゆうゆうと食事、この時他の鳥たちは木に隠れてヒヨドリが去るのを覗き見している。ヒヨドリが去るとサーと降りてきてミカンや脂肉をついばんでいくが、いつも周りを見回しヒヨドリが来るのを警戒している。すると間もなくまたヒヨドリがきて追い払う。小鳥は木に避難する。いつもこの繰り返しである。先日は、この寒い冬の時期にメジロが飲み水の容器の中で水浴びをしている光景を目にした。メジロの水浴びは私にとっては初めての観察である。こうした鳥たちの行動を見ていると、何とも愛嬌があり、長い間見ても飽きがこない。

今シーズンは例年と違い、彼らが餌を食べにこないのである。そして周囲で見かける鳥の数も例年より少ないように見える。どうしたことか。そのわけは、例年ならいはずのおいしい餌が、いまだにあちこちにあるからではなかろうか。家の周りには柿やナンテンの実がまだ木に残っている。昨年は例年になく実りが豊かであったのではと考えられる。これも今問題になっている地球温暖化の影響かもしれない。

野鳥にとってはうれしいことかも知れないが、私にとっては寂しいことである。

(大島)



## ツキを呼ぶ魔法の言葉

私は最近「ツキを呼ぶ魔法の言葉」と言う講演筆録を読む機会を得ました。こう書くと前々号は映画で今回は読後感かい！と、私の執筆パターンがわかっちゃうようですが、新年でもあるし、これもクセの内とおぼし召し、しばしお付き合いのほどを。

日本では毎年8万～9万社位会社が設立されるそうですが、3年後にはその内の40%が、5年後には85%が倒産というかたちでなくなってしまうそうです。厳しい世の中ですね。

そこで、それぞれの社長さんに「勝因はなんですか？」「敗因はなんですか？」と聞いてみたそうです。すると生き残った社長曰く「運が良かった」、倒産した社長は「運が悪かった」。みな運、運というのだそうです。

それでは運というのはいったい何なのでしょう。本質的なことは私（講演者）もよく分からないんだけど、本当に簡単なことで、ツキというものを手にすることができる、「ツキ放しになっちゃうんです」と言っていました。そのツキを呼ぶ言葉として「ありがとう」「感謝します」を挙げていました。逆にツキが吹っ飛んじゃう言葉として「バカヤロウ」「クソツタレ」「死んじまえ」「てめー」などのことばを挙げておりました。

そういえば松下電器の創始者松下幸之助さんは、その人生の出発点において、父親の米相場に手を出しての失敗と破産、この為か9才の時小学校を中退して大阪の火鉢屋での丁稚奉公、結核での親兄弟の死亡、ご自身20才の時肺炎カタルを患い病床に伏したことなど、はた目には「なんて運が悪いのだろう」と思ってしまう事でも、生前の松下さんは「わしは学校にほとんど行っていなかったから良かった。運が強かった。もし、大学でも行っていたら、分からないことも他人に尋ねることはしなかった。行っていなかったから、分からないのが当たり前、だから簡単に尋ねることができた。おかげでたくさんの人から良い知恵を貰って会社を発展させることができた」とその境遇に感謝している記事を読んだことがあります。

私などパートナー対応のなかで帰り際に子供達から「ありがとう」「ありがとうございました」な～んて云われると、今までの疲れもふっとび「またおいで、もっと良く教えてあげるから」という気分になっちゃうんですけど、みなさんは如何ですか。

(浅野)

## 香澄俳壇

湖の  
静寂破る お邪魔カモ

さらさらと  
光るさざ波 カモの影

(以上大島作)

孫光の  
梅を写して 持ち帰る

(大宰府にて)

主のいぬ  
庭にあじさい あじやかに

(近所の庭)

三日月の  
形するどく 若き日よ

(以上尾形作)

## 『パートナー香澄』原稿募集

「パートナー香澄」の原稿を募集しています。特にテーマは設けません。パートナーご自身のプロフィールとセンターでの活動体験記や身の回りの話題など何でも結構です。写真の添付も歓迎します。

次号は4月末発行予定で、原稿締め切りは3月20日です。

パートナー室パートナー香澄メールボックスにお入れ下さい。

### 編集委員

尾形	孝彦
浅野	明宏
有吉	潔
大島	寿夫
栗原	知彦
平江	俊之
安川	敏行
稲葉	寛